

# 「彼ら」はドゥテルテ大統領を、本当に殺そうとするだろうか？

【訳者注】西側の偽善に対する挑戦状のような、ヴルチェクの激しい論文である。ドナルド・トランプのようなタイプの政治家ドゥテルテが、フィリピンの大統領として、文字通り死ぬ覚悟で、西側に挑戦し、彼らを排除して大改革を進めている。そんな場合、ほとんど確実に暗殺か、よくても追放に終わるのが、今の世界では常識になっている。ドゥテルテはそれを承知の上でやっている。壮絶というべきであろう。

西側の、狂気の、残忍で強欲な、世界支配計画に対抗するためには、このような破天荒な人物が、現れなければならないのだろう。我々はこの事実を承知していなければならない。メディアの宣伝に騙されて、「そうか、フィリピンにもトランプに似た悪い奴が現れたか」などと言う人は、もういないことを希望する。

ドゥテルテの悪罵は激しいが、彼の先輩、ベネズエラのウゴ・チャベス大統領（2013年没）の、ここに引用されていない寸鉄のせりふを紹介する。チャベスは、2006年の国連総会の演壇から、ジョージ・W・ブッシュ大統領を指してこう言った——「きのう悪魔がここへやってきました。まさにここです。そして、いまだにここは硫黄のにおいがします」（注：硫黄は悪魔の付き物）。日が経つほどに、彼らの激しい怒りが実感としてわかってくる。

Andre Vltchek

October 17, 2016, Information Clearing House



ロドリゴ・ドゥテルテ、あの歯に布着せぬフィリピン大統領は、今ごろ、おそらく間違いなく、「帝国」の隠された、権威ある、恒久的なヒット・リスト（暗殺リスト）に加えられているだろう。

このヒット・リストは恐ろしく長い。もう数十年前から、すでにこの状態だった。誰でも、数え間違っで混乱してしまうだろう。どれくらいの人物がマークされ、密かに殺しの指定をされたらだろうか？ そのうち、どれくらいが実際に死んだことだろうか？

それは、輝かしい世界的リーダーの名簿のように読める——パトリス・ルムンバ（ザイール）、ムハンマド・モサデク（イラン）、ウゴ・チャベス（ベネズエラ）、スカルノ（インドネシア）、ジュベナール・ハビヤリマーナ（ルワンダ）、サルバドール・アジェンデ（チリ）から、ムアンマール・カダフィ（リビア）、アル・バシール（スーダン）、フィーデル・カストロ（キューバ）まで、これはわずかの例にすぎない。

ある者は直接、暗殺され、ある者は職を降ろされた。ほんの一握みの“マーク”されたリーダーが、何とか生き残り政権についている。

彼らの“犯罪”のほとんどに共通する、いくつかの罪状がある——自分の国と自国民の生命にかかわる利益を守ったこと、多国籍企業による無制限な天然資源の略奪を拒否したこと、帝国主義の原理に対して立ち上がったこと。帝国の批判をただで、死罪となったこともしばしばある。

ドゥテルテ氏は、この上にあげたすべての恐ろしい罪を犯しつつある。彼は“起訴通り”に罪を認めているようだ。彼は何も否定していない。彼は、自分に向けられた罪状を、誇りにさえ思っているように見える。

「彼は人生が嫌になったのだろうか？」という人たちがいる。「頭がおかしくなったのだろうか？ 死ぬ覚悟をしているのか？」

「彼は英雄だろうか？ アジアのウゴ・チャベスなのか、それとも自製の利かなくなったポピュリストなのか？」

間違いなく彼は多くを賭けている。もしかしたら、本当にすべてを賭けているのかもしれない。彼はいま、西側政府の目からみれば、最も許されない罪を犯している——彼は「帝国」とその諸機関（国連、NATO、それに EU を含めて）を、公然と侮辱している。彼は彼らの顔に唾を吐きかけてさえいる！

“なお悪いことに”彼はしゃべるだけではない。断固とした行動を取っている！ 彼は自分の国の貧民を助けようとし、共産党や社会党にまで手を出している。中でも最も大きなことは、基本的に、中国とロシアに援助を求めていることだ。

火花が飛び交っている。繰り返し、オバマや法王、アメリカ、EU、国連など、人々や組織が、地獄へ落ちるように要求され、彼らは“野郎”とか“馬鹿者”とか呼ばれている！ そ

してフィリピン国民は、間違いなくそれが気に入っている。ドゥテルテはわずかの差で選挙に勝った。しかし彼の最近の支持率は、76%という驚くべき高さを誇っている。そこである人たちは、もし“民主主義”が本当に“人民による支配”ならば（あるいは、少なくとも人民の意思を反映するものなら）、これこそまさに、フィリピンのあるべき姿だと論じている。

\*

フィリピン Diliman 大学のアジア研究教授 Eduardo Climaco Tademn は、私への私信の中でこう言っている――

「いろんな面で積極的で大胆な政策が取られている。農地改革、社会的事業や開発、また貧困対策としての、共産党幹部の入閣はよいことだ。他の左翼や進歩の人士が、労働、教育、医療、科学、環境問題で、内閣の他のポストを占めている。もっと重要なことは、土地配分について積極的な大胆な前進があったこと、労働契約制度を終わらせたこと、海外から学び、キューバの医療プログラムを取り入れたこと、大掘削企業による環境破壊を縮小させたことだ。のみならず CPP や MILF/MNLF との平和交渉が復活し、積極的で有益な方向へ向かっている。

「独立した対外政策が発表され、ドゥテルテはもはや、彼の前任者たちのように、アメリカや西側諸国の言うことを聞く気はない。彼はまた中国との垣根を作り替え、南シナ海での領土争いに、今までと違った、好戦的でない路線を取ろうとしている。……」

これはすべてまづいことだ――ワシントン、ロンドン、東京に関する限り、きわめてまづいことである。このような振舞いを、処罰しないで見過ごすことはできない！

「帝国」の反応が、この場合には、ほとんど時間を置かずにやってきた。

2016年9月20日、インタナショナル・ビジネス・タイムズがこう報じた――

「フィリピン政府は、ロドリゴ・ドゥテルテ大統領に対して、クーデタが目論まれていると主張し、政府は容疑者を割り出し中であると話した。ある政府報道官は、ニューヨークのフィリピン-アメリカ人のある者たちが、この目障りなリーダーの追放を図っていると言った。

「容疑者の名前や、彼らの計画を明らかにすることなく、フィリピン政府報道官 Martin Andanar は、ドゥテルテを狙って共謀している者たちは、〈考え直した方がよい…私は

アメリカの信頼できる筋から情報を得ている。そうだ、名前もわかっているが、それは言いたくない。我々は真剣にそれを観察している。我々はそれを調査している」と、この政府高官は話した。」

クーデタ、暗殺計画、ソフト・クーデタ、ハード・クーデタ——ブラジル、アルゼンチン、ボリビア、ベネズエラ、シリア、ウクライナ、リビア、パラグアイ、ホンジュラス、それにスーダン、アフリカの半分……。そのすべてが過去数年間のことである。…そして今、フィリピンで起こっている。ブラボー、「帝国」は加速している！ その殺し屋の仕事倫理は、明らかに改善しつつある。

\*

ドゥテルテ大統領はそのすべてを割り出している。上に述べたように、彼はすでにオバマ大統領を“野郎”と呼び、“馬鹿者”と言った。そして最近は、「地獄へ行く」がよいと言った。

これは、ウゴ・チャベス大統領が、ジョージ・W・ブッシュ大統領についてよく言っていたことより、もっと過激である。そしてチャベス大統領は、多くのラテンアメリカのアナリストによれば、米帝国と帝国主義一般に向けた、歯に布着せぬ発言や敵意に対して、自分の命をもって支払った。

実のところ、「帝国」は、彼らの姿に鏡を差し出す者を決して許さない。彼らは、ごくわずかの不柔順、反骨精神を示す者でも無慈悲に殺す。そのプロパガンダ装置で右腕のマスクメディアが、この場合常に、適当な正当化の説明を巧く作り上げる。そして北米とヨーロッパの大衆は、十分に満足し、洗脳され、疑うことはない。彼らは自分の狭い利益を必死に守るだけで、決して犠牲者を顧みることはない——特に彼らが「非人間」の住む、どこか遠い国の住人である場合には。

偉大なインドネシア大統領スカルノは、アメリカの大使に向かって（他の発言の中で）公然と「君の援助など糞くらえ！」と叫んだために、引き降ろされ滅ぼされた——そしてもちろん、帝国に対して彼の国民の利益を守ったためだ。パトリス・ルムンバは、大胆にも、アフリカの住民は、植民者たちに感謝する理由などないと言ったために暗殺された。

ドゥテルテはそれ以上のことを言っている。彼は辛辣であり、それには数えきれない理由がある。アメリカは100万以上のフィリピン人を殺し、そのほとんどは、19世紀の終わりと20世紀の初めのことだった。最近の歴史では、アメリカは、このかつて誇りをもち有望だった国家を、完全にワシントンの気まぐれによって、玄関マットにし、屈辱的な半植民地に

してしまった。資本主義的な、全面的に親米のフィリピン人がそこから現れ、それはインドネシアのような「失敗国家」、社会的災難と知的荒廢の地に変わってしまった。

\*

ドゥテルテ大統領は、同じような考えをもつ知識人や官僚を集め、決然とした内閣を作るのに成功した。

RTは最近こう言っている——

ドゥテルテの外務大臣 **Perfecto Yasay** は、たびたび上司の言葉をやわらげることがあったが、このたび、「アメリカは我々を裏切った」という題の声明をフェイスブックに載せ、「アメリカに対していつまでも感謝すべきことは無数にあるが、アメリカはフィリピンの独立を十分に尊重したことは決してない」と述べた。

「1946年7月4日、アメリカは、フィリピン人には政治的自決と自助の訓練を十分に施したと宣言した後で、我々に、目に見えない鎖をしっかりとかけ、本当の独立と自由の能力をもたない褐色の弟として、我々を、依存と服従の方向に導こうとした」と、この外相は声明の中で述べた。

このような声明が、西側の主流メディア刊行物に現れることは非常にまれであり、その中でドゥテルテと彼の内閣は、とめどもなく悪魔化され嘲笑されている。

フィリピンについてのごく最近の記事見出しは、このように言っている——

「プレイボーイ実力者 **Antony Moynihan** の麻薬取引をする娘が、フィリピンで射殺される」(デイリー・メール)

「フィリピン大統領が、人間を生きたままワニに食わせたとして非難される」(ザ・ジャーナル)

「特別レポート——ドゥテルテの麻薬との戦いで、地方住民がヒット・リスト作成に助力」(ロイター)

「ドゥテルテが司法官吏を殺害——暗殺者がフィリピン議員に知らせる」(AFP)

社会的正義のための戦いについては何も言われていない！ 西側帝国主義との戦いについても何もない。

麻薬との戦い……

確かに、フィリピンの多くの人々が、「死体が山と積まれ」ていることを心から憂慮しており、この政府のやり方は、あまりにも厳しく、我慢できないとさえ言えるだろう。

しかし、事情はそれほど単純ではない。ここはヨーロッパではない。ここは、それ自体の文化の力学と問題をもったアジアである。フィリピンでは、犯罪率はグロテスクなほど高く、アジア太平洋地域ではほとんど他に例を見ない。犯罪の多くは麻薬に関係している。そして人々は心からうんざりしている。彼らは断固たる行動を求めている。

何年にもわたって、ドゥテルテ氏は、ミンダナオ島の都市ダバオの市長をやっていた。ダバオは若者の犯罪の代名詞だった。そこは住むには困難で、治めるのはほとんど不可能だと多くの人が言っている。

ドゥテルテ氏は正直だ。彼は、もし自分が「十戒」を守っていたら、ダバオの市長は長続きはしかなかっただろうと、公然と認めている。おそらく誰がやっても同じである。

彼は、彼の人権に関する記録に対する批判に、極端に敏感である。その批判が国連から来ようが、EUやアメリカから来ようが、彼の答えのほとんどは、挑戦的で終始一貫している——「何を抜かすか！」

そしてこれが、通常、西側で報道されている。

しかし省略されるのは、ロドリゴ・ドゥテルテが通常、次のように説明することである——

人権を、あなたは問題にするのか？ あなた方が世界中で、最近で言えば、イラク、リビア、シリアで殺している何百万という人々はどうなのだ？ あなた方がもっと前に虐殺したフィリピンの人民についてはどうか？ そして、あなた方の自国民に対してはどうなのだ——毎日のように警察に殺されているアフリカ系アメリカ人については？

彼は、西側の偽善に対する、自分の深いアレルギーを隠そうとしない。何世紀にもわたって、アメリカやヨーロッパは、何百万の人々を殺し、大陸を隅々まで略奪し、そして他者に対しては、裁定し、批判し、高飛車に出る権利を確保している——直接的に、あるいは国連のよ

うな、彼らの支配する組織を通じて。ここでも、彼の答えは明瞭にスカルノ的である——「地獄へ落ちろ！ お前の助言など糞くらえ！」

しかしこれは、ニューヨーク・タイムズやエコノミストには書かれていない。そこに書かれているのは、もっぱら、“麻薬との戦い”について、“無実の犠牲者”について、そしてもちろん“独裁者ドゥテルテ”についてである。

\*

こうした状況が急速に展開しつつある。

最近、ドゥテルテ大統領は、“フィリピン陸海両用艇上陸演習”と名付けられた軍事演習の停止を命じた。それは10月4日に始まり、1週間以上続けられる予定だった。1,400名ほどの米兵と、500名のフィリピン人部隊がこの戦争ごっこに参加し、一部は、南シナ海の紛争海域の近くの危険な場所で行われた。

何人かの主導的なフィリピンの知識人によれば、アメリカは、この地域での侵略的な帝国主義野心を示すのに、フィリピン人を使い、一貫して中国に対する敵対行動と挑発を行わせた。ドゥテルテの政府は、中国にこれまでより接近し、西側から離れようと決意している。フィリピンと中国が、予見可能な将来、すべての不和を解消できる可能性は高い——つまり、もしアメリカが退き、永久的に介入しなければ、ということだ。

中国に対する好意を示すために、そして、その新しい独立した路線を示すために、マニラ政府は、アメリカとの年28回の恒例の軍事演習を、キャンセルする計画をしている。

ドゥテルテ大統領は、何が賭けられているかを完全に知っている。在職100日を記念して、彼はいくつかの激しいスピーチを行い、西側は彼を職から引き離すか、殺す試みをするだろうと、公然と認めた。

「君たちは私を追い払いたいのか？ CIA を使ってそうするつもりか？ やりたまえ… いらっしゃい、私は屁とも思わない。私を追放する？ 結構だ。(もしそうなれば) それは私の運命の一部だ。運命にはいろんなことが積み込まれている。もし私が死ねば、それは私の運命の一部だ。大統領というものは暗殺されるものだ。」

その通り——確かに大統領はよく暗殺される。

しかし、最近、次から次と、世界中の国々が、反帝国主義の連合に参加しつつある。勝利しつつある国々もあり、不安定化された国（ブラジルのような）、経済的に荒廃した国（ベネズエラのように）、完全に破壊された国（リビアのような）もある。すべての挑戦的な国々が、ロシアから中国、北朝鮮、イランに至るまで、西側のプロパガンダとそのマスメディによって、悪魔化されている。

しかし、世界は、もう十分なところまで行き着いたように思われる。「帝国」は崩壊しつつある。パニックを起こしつつある。彼らはますます殺しているが、勝利は得ていない。

フィリピン人もこの同盟に参加しているだろうか？ 就任後わずか 100 日で、ドゥテルテ大統領は決心を固めたように見える——これ以上、隷従はごめんだ！ もう後に戻ることはない！

彼は生き残れるだろうか？ 彼はこのコースを死守するだろうか？

何という剛健な男だろう！ 「帝国」に立ち向かうには鉄の精神力が必要である！ 無数の入り組んだ暗殺計画や、手の込んだプロパガンダ戦略を生き延びるためには、少なくとも 9 つの命をもっていなければならない。彼はその用意をしているだろうか？ 用意しているように思われる。

彼の国のエリートたちは、完全に西側に自分を売り渡している。これはインドネシアのエリートの場合も、もっとひどいが、タイやマレーシアの場合も同じである。

それは激しい闘争になるだろう。すでにそうになっている。

しかし、彼の国家の大多数は彼を応援している。現代史上で初めて、フィリピン人は、自分の運命を自分の手でコントロールするチャンスを得たのかもしれない。

そして、もし西側が、マニラから流れてくる情報に対し、怪しからんと言ったらどうか？ ドゥテルテ大統領は意に介さない。彼はすでに、大量の質問に答える用意ができていると宣言している。そして西側がそれに反論できなかったら？

「もし彼らが答えることができなかったら、馬鹿者ども、ゴー・ホームだ。蹴とばしてやる。私を怒らせるな！ 彼らは私より賢いなどと思ったら大間違いだ！」

全くその通り、彼らが彼より賢いということはないだろう。しかし彼らは間違いなく、彼よ

り非情で、残忍だ。

彼らは、彼の何を怪しからんと言うのか？ 3,000 の命を奪った“麻薬との戦い”である。

どれだけの命を、西側（あるいは、最近、多くのフィリピン人が呼ぶように、あの“野郎ども”）は、第二次大戦後、世界中で奪ったというのか？ 4,000 万から 5,000 万だろう。それは数え方による。殺しが直接的か間接的かの違いだ。「帝国」はほとんど確実に、ドゥテルテ大統領を殺そうとするだろう——おそらく直ぐにも、非常に早い時期に。

生き残るためには、方針を貫くためには、痛めつけられた祖国を守るためには、戦闘準備をしなければならないだろう。

（アンドレ・ヴルチェクの経歴・紹介については、下の論文の末尾をご覧ください。）

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/151121.pdf>